

心の糸が再び結ばれる時

拝啓

このたびは、「認知症 700 万人時代」という大きな問いに対し、写真と語りを通した処方箋をいただきありがとうございました。ファーストインスピレーションから先生の柔和な表情に引き込まれていた私です（ファンレターみたいですね）。

「知ることが薬になる」。その言葉の心理を紐解く 90 分でした。認知症になったときの不安、混乱、そして受容から希望を見出していく。その一連のストーリーがステージフォトという技法による美しい写真とともに語られていました。モノクロで不安や焦りがにじむ写真が、同じく靄がかかりながらも光と淡い色に包まれた写真への変化へと移ろうことで、心の変化がよく伝わってきました。

認知症の方が「今が幸せ」と語られたように、私達も情報に溺れることなく、自分の感性を取り戻し、認知症の方や障害を持った方と「共に生きる人」としての関係性を築くことができたらしと感じました。

印象に残ったのは、「心の糸」という言葉。妻が夫を「お父さん」と呼んだ日、二人を結んでいた糸がぷつりと切れた一けれど、その日から夫は「お父さん」の役割を生きることを選び、糸を結び直そうとした。愛は形を変えて続いていくものなのだと感じ、胸が熱くなりました。単行本に収められた「切れた糸」の2枚の写真——あの仕掛けは本の中で種明かしされているのでしょうか？ 見つけられる人には見つけれる繋がった糸。写真は“真実”を写すものであると同時に、見る者の心を映す“媒介”でもある。私も、あの糸のつながりを見つけられる人でありたいと、心から思いました。

貴重な学びと、深い問いをありがとうございました。先生が表現されてきた多くのストーリーと示唆が、これからも多くの人の希望と気づきにつながっていくことを願っております。

敬具

令和7年7月 17 日

長浜 麻紀子

松村 和彦 様